

身体の外に道具を造り出し、それを使って生きることは、身体の能力を大きく拡大させる。果てもなく大きくさせてきたのが人類の歴史である。それによって、人間は他のすべての動物種との争いに勝ち、支配者の立場に立てるようになった。それによって、食べ物や住居の安全は、おおかた保証された。文明とは、こうした道具が生み続けてきた、自然界と身体との人間独自の関係を指すと言ってもいい。

したがって、道具は、人間がその身体能力を高めるため、他の動物との争いに勝つただけに現われてきたのではないだろう。身体が自然界の一部分としてそのなかで働く、その働き方の性質を、道具の出現は、根本から変えた。人間の身体は、道具の使用によって、言うなれば自然界のメカニズムを少しだけはずれ、それとの間に隔たりを創り、その隔たりによって、自然とは何かを(知る)道を拓いた。知ってどうなったかは、言うまでもない。①自然界のメカニズムは、人間の計算に応じて、エネルギーの方向を、その発現や保存のメカニズムを変えてくれるようになった。

しかし、それだけではあるまい。自然とは何かを(知る)ようになった人類は、道具を提げ、道具の働きとひとつになって、自然の奥深くに入り込み、底知れないその在りように驚嘆し、感謝し、畏敬の念をも抱くようになった。これは、宗教の始まりだろう。宗教の発生は、道具の発明と共にあったとさえ言える。

これとは反対に、②ただ得をしよう、楽をしよう、他を支配しようとして伸びていく道具の方向は、自然への、あるいは物が在ることへの信仰心を殺してしまう。③道具が産んだ信仰心を、その道具のもう一方の性格が、殺してしまうのである。道具の持っている避けられない宿命が、ここにある。道具の使用には、矛盾し合うふたつの方向がある。始めのうちは混沌^{こんとん}としてひとつであったこれらの方向は、人類の歴史を通じて次第にはつきりと分岐し、ついに近代に到った。ここで引き起こされた分裂は、後戻りのできない文明の矛盾を抱えていると言える。

近代の機械産業が一途に追求した道具の方向は、人間の手の働きを、技能を、どこまでも離れていこうとする。ほとんど無人の工場で、ロボット化した機械だけが作動し、同じものが大量に、安価に製造され、これまた無人のシステムで際限なく売られ、流通していくことが、ここでは最も望ましいとされる。その先のことは考えない。経営者が考えないだけでなく、人類全体が、その先を見ることに眼を塞いでいる。だが、その先の大変化は、すぐそこまで来ているように思われる。

それにしても、ロボット化した機械が、何もかもをする時代になるとしたら、そんな機械の開発とは無縁の大多数の人間は、一体何をすることになるのだろうか。仕事がなくなれば、当然ながら賃金収入もなくなり、社会での消費は^aコカツし、地球の資源だけは間違いなく減っていく。笑い事ではない。何か新しい道具を夢中で発明する人と、それが人類に何を負わせるかを考える人とは、*プラトンが言うように、確かに別のようである。

不思議だったのは、大学の授業で社会がロボット化していく話題になると、学生たちが急に元氣そうになることだ。将棋名人がロボットに負けるくらいは、^A序の口で、そのうち論文も小説もロボットのほうがしつかり書くようになるだろう、何かにそう書いてあったと、嬉々とした口調で言う。もつとも、その時まで論文や小説が求められていければの話だが、という^B但し書きもついて、教室はニヤニヤ笑いの渦になる。私は、一向に面白くない。

もちろん、彼らは、IT社会とやら一般に蔓延^{まんえん}する気分を、代弁してそう言っているのだろう。私は、放っておけない気がして、いろいろな説いて聞かせる。君たちには、人間の思考の性質と、計算機械の性質との両方について実に大きな誤解、混同、無知があると。しかし、なかなか*ソクラテスのようにはいかない。学生たちも*バイドロスのように、喰^く下がってくれない。そんなややこしい話は、この際どうでもいい、といった風情である。その気持ちも、わからないではないから、一層窮する。

社会がロボット化するという話題を、学生たちが喜ぶのは、近い未来のそういう社会には、科学の進歩のおかげで何かとつもなく楽な学ばず、働かず、遊んでばかりいられる暮らしがやって来るのではないか、という漠とした予感が、あるいは期待があるからだろう。実際、人類全体のそうした期待を背負って、近代以降の応用科学と機械産業とは発展を続けてきた。汽車、自動車、飛行機、電気機器、そしてコンピュータ製品、みな大変ありがたい文明の産物だというわけである。④^④これのどこに、文句がある。

しかし、近代科学が一举にもたらした途方もない道具の発明、発達は、ただ人間が楽をすることだけを目的にしていたのではない。そんな目的は、人を欺く見かけだったかも知れぬ。ほんとうの目的は、もっと残酷なところ——他を出し抜き、いろいろなもの争奪戦すべてに勝ち、特定の共同体が人類への支配権を握る、というところにあつたのではないか。近代産業が効率や速度や物量を追求してきたのは、そのためだろう。また、そうした目的に向かって突き進まなければ、近代の機械産業は、みずからの経営を^bイジできない、というようなシステムを内側に含んでいた。これは、少しもありがたい話ではない。

すでに述べたように、人類がその(手)によって産んだ道具には、もうひとつの方向があり、その方向は、近代の機械産業に直接発展していかなかった。だが、それは今もはつきりとあり、私たちの生命を、その喜びを、現に支えているのではないか。⑤近代文明がすっかり世を蔽^{おほ}う前の手工業では、道具が持つふたつの方向は、まだ完全には分岐していない。分岐の兆しを至るところに見せながら、ふたつは常に補い合っている。職人の手仕事は、機械に助けられ、機械の多くは職人の手が造り出し、動かしていた。

近代は、工業機械の作動が、できるだけ職人の手業から離れて行こうとした時代である。手による熟練を嫌う近代科学の知性は、人間から真の熟練を滅ぼしたあと、何がやって来るかについて、考える智慧も洞察力も持っていない。過去のすべてを破棄して進むことが、科学の習性なら、人間が生きる智慧をここに求めることは、愚かなことだろう。手を働かす業への真の熟練は、智慧が育たなくては ジヨウジュ しない。大工でも、機械工でも、料理人でも、優れた職人を見れば、それは明らかにわかることである。

近代の機械産業が、手による熟練をどんなに ハイジョ し、無効にしようとしても、おそらく人類から優れた職人がすっかり消えてしまうことはないだろう。なぜなら、人類が使う道具には、その発生からふたつの方向があつて、道具というものが在る限り、そのふたつの方向は、分岐しながら、活き続けていくからだ。

思えば、道具が含むこの二重性は、人類の生そのものが持っている二重性に根差しているだろう。私たちの身体は、一方では、ひとつの行動の中心として、外の事物に自由に働きかけ、それをうまく利用し、できれば完全に支配しようとし、楽をして最大限の得をしようとしている。道具は、そのために用いられる。

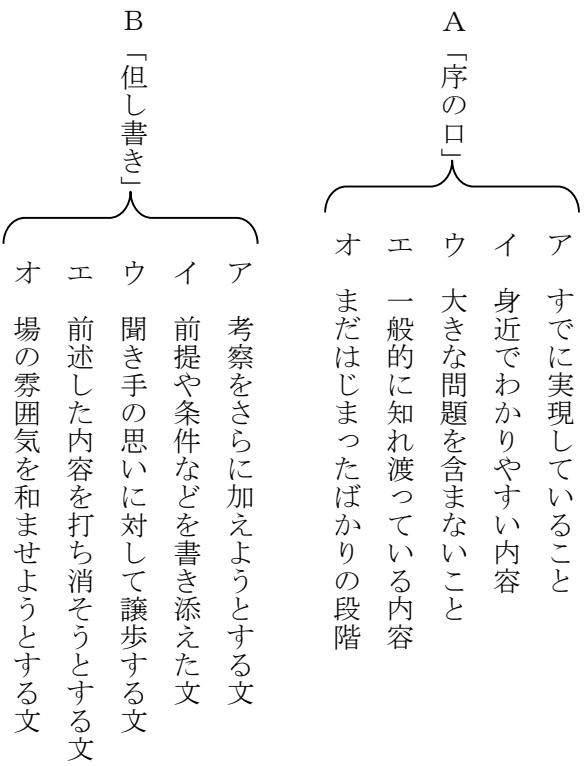
しかし、他方では、私たちの身体は、行動の中心であるだけではない、自然の内側を、自然と共に流れ、そこで無数のことを感じさせられる。こうした感覚は、あくまで強いられたものであつて、人間の勝手にはならない。私たちの行動は、どんな時でも、この流れのなかで生まれ続ける感覚とは無関係でいられない。道具は、この感覚を研ぎ、在る物の奥深くに入り込み、そこで、身体と自然とがひとつになって流れる新しい独特の通路を産み出す。常人の想像をはるかに超えた職人の業は、道具が含むこの方向でこそ磨かれるのだろう。

(前田英樹『愛読の方法』ちくま新書)

*注 プラトン・ソクラテス・パイドロス いずれも古代ギリシアの哲学者。

問一 a d のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〓線部A「序の口」、B「但し書き」の本文における意味として最も適切なものを、それぞれ次の中から一つ選び、記号で答えなさい。



問三 〓線部①に見られる変化は、どのようなことがもたらしたのか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自然の脅威と戦いながら生きてきた人間が、道具の発明とその使用を通して、自然を共存するものとして認めるようになったこと。
- イ 自然は理解しがたい複雑な構造を有していたが、人間が道具を発明・使用するようになったことで、そのメカニズムの単純さが表面化してきたこと。
- ウ 本来自然の一部であつたはずの人間が、道具の発明とその使用によって、自然を人間のために存在する対象物として見るようになったこと。
- エ 古来より自然は変化し続けてきたが、人間が道具を発明・使用するようになったことにより、常に同じ状態で存在するものと化したこと。
- オ 自然を操作可能なものにして、人間が道具を発明・使用するようになった結果、自然そのものが世界から消え始めたこと。

問四 〓線部②について、次の(1)、(2)に相当する部分をそれぞれ本文中から一文の形で抜き出し、最初の五字で答えなさい。

- (1) これが社会にどのような考え方をもたらすようになるかということを具体的に述べた部分。
- (2) これが人々にどのような結果をもたらすかという筆者の見方を具体的に述べた部分。

問五 ——線部③とあるが、この場合の「道具」はどのような働きをするのか。本文中の言葉を用いて五十字程度で説明しなさい。

問六 ——線部④とあるが、この部分について二人の高校生が意見を交わしている。空欄(1)～(3)にそれぞれの条件に合わせて、適切な言葉を入れなさい。

生徒A この部分で話題になっているのは、「近代科学がもたらした道具の発明と発達」だね。これに関しては一面的に捉えてはいけな
ようだ。筆者には「これのどこに、文句があるう」と言うように認めざるを得ない点と、
を抜き出すこと
「と言うように容認できない点があるんだよ。」
(1) 本文中から二十字以内の言葉

生徒B なるほど、そうね。筆者自身は、
(2) 六十字程度の言葉を自分で考えること
ということを重ねているんだけど、
(3) 五十字程度の言葉を自分で考えること
という一般的な見方にも譲歩しているのね。

問七 ——線部⑤とあるが、筆者は「近代文明がすっかり世を蔽^{おほ}う前の手工業」の性質をどのような点に見ているか。「近代文明」の時代に
おける科学の特徴と比較して説明しなさい。

問八 本文の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は、道具が生み出されてきた歴史的な背景を人間に備わっている性質との関係において説明し、快適な環境をもたらすはずの道具
が、かえって人間を不幸にするのではないかという危惧を根拠とともに示している。

イ 筆者は、近代科学技術の発展によって道具の持つ意味が変質したとする独自の見解を述べながら、科学技術を人間の生活に寄与するも
のとするためには、今後どのような方策をとる必要があるのかという点に言及している。

ウ 筆者は、人間が空疎な自己に不安を感じ始めるようになったのは、道具の意味を外界との交渉手段として一義的に捉えた結果であると
指摘しつつ、人々が心豊かに交流しながら生きてきた伝統社会への回帰を訴えている。

エ 筆者は、道具には外界の事物のみならず、自己の内部とも関係を築いていこうとする二重性が潜んでいると述べたうえで、その性質に
は人間存在そのもののあり方が端的に示されているのではないかという見解を述べている。

オ 筆者は、人間の心の動きには相反する二つの側面があり、それが道具をめぐる現代の問題を生み出したと説明したうえで、人間自身が
個々の内面を制御して生きることこそが課題解決のための唯一の方法であると主張している。



次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(三十点)

①今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎまづ出でてまぎれ暮らし、待つ人は障りありて、②頼めぬ人は来たり、頼みたる方の事は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事はことなくて、a やすかるべき事はいと心苦し。日々に過ぎ行くさま、かねて思ひつるには似ず。一年のうちもかくのごとし。一生の間もまた③しかなり。かねてのb あらまし、皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、c いよいよものは定めがたし。*不定と心得ぬるのみ誠に違はず。

*注 不定⇨不確かで定まっていないこと。

問一 — 線部 a、b、c の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|----------|--------|---------|-------|--------|--------|
| a 「やすかる」 | ア たやすい | イ やすらかな | ウ 安心な | エ 楽しい | オ 頼もしい |
| b 「あらまし」 | ア 希望 | イ 予定 | ウ 事情 | エ 内容 | オ 概略 |
| c 「いよいよ」 | ア ついに | イ 確かに | ウ 全く | エ とうとう | オ ますます |

問二 — 線部①「今日はその事をなさんと思へど」を口語訳しなさい。

問三 — 線部②「頼めぬ人」と対応する言葉(対句)を本文から抜き出しなさい。

問四 — 線部③「しかなり」がさしている部分を本文から十字程度で抜き出しなさい。

問五 筆者はこの文章を通じてどのようなことが大事だと言っているか、答えなさい。

問六 この文章は兼好法師の作品の一節である。この作品の名前を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 方丈記 イ 枕草子 ウ 発心集 エ 徒然草 オ 更級日記

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、返り点を省いた箇所がある。)(二十点)

夫^{それ}呉^{*ご}人^{ひと}与^と二^と越^{*えつ}人^{ひと}一^{ひと}相^{あひ}悪^{にくムモ}也、^①当^{タリテハ}其^{その}同^{ジクシテ}舟^{フネ}而^ニ济^{*わたリ}遇^{あフニ}風^ニ、
 其^{その}相^{あひ}救^{ユク}也、^②如^シ二^と左^サ右^ウ手^テ一^{ひと}。是^{コノ}故^ニ方^{なら}馬^バ埋^{*うづムルモ}輪^ヲ、^③未^{いま}足^ラレ
 恃^{たのムニ}也。*^④齐^{ととの}勇^ヲ若^レ一^{いつ}、*^⑤政^{まつりごと}之^の道^{ミチ}也。*^⑥刚^{ツヨク}柔^{ユル}皆^{ルハ}得^ル、*^⑦地^チ之^の
 理^リ也。故^ニ善^ク用^{キル}兵^ヲ者^ハ、*^⑧携^{たづさへ}手^ヲ若^ク使^{フガ}二^ニ 一^ヲ。

『孫子』

*注 呉・越||春秋時代の国名。隣国同士で長い間争っていた。 济||河を渡る。

埋輪||戦車の車輪を地に埋めて動かぬようにし、陣の備えとする。 恃||頼りとする。 あてにする。 齐勇||全員が勇気を出す。

政之道||旗印など軍の制度をうまく運用すること。 刚柔皆得||強い者も弱い者も役割を果たす。

地之理||環境に備わった道理が自然とそうさせること。 携手||軍を一致団結させる。

問一 || 線部 a、b の読みを送り仮名も含めて全て平仮名で答えなさい。現代仮名遣いでもよい。

問二 || 線部 ①は「其の舟を同じくして济り風に遇ふに当たりては」と読む。この読みに従って返り点を施しなさい。

問三 || 線部 ②は「左右の手のごとし」と読む。これがたとえている意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 別々の方法で対応している。
- イ それぞれの役割が異なっている。
- ウ 強者の方が力を發揮するものだ。
- エ お互いに助け合うものである。
- オ 思い通りに使いこなせるものだ。

問四 || 線部 ③は「未だ恃むに足らざるなり。」と読む。口語訳しなさい。

問五 || にあてはまる言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一人
- イ 多勢
- ウ 君子
- エ 兵馬
- オ 左右

問六 この話から生まれた故事成語で、非常に仲の悪い者同士が一緒にいることを表すものを四字で書きなさい。ただし、四字全て本文中の漢字を用いること。

国語 解答用紙 (その二)

—

問一

d	a
	b
	c

問二

A
B

問三

--

問四

(2)	(1)

問五

得点

受験番号	
------	--

問六

	(3)	(2)	(1)

問七

問八

--

国語 解答用紙 (その二)

二

問一

a
b
c

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

三

問一

a
b

問二

遇 当
風 其
同
舟
而
濟

問三

--

問四

--

問五

--

問六

受験番号	
------	--